

...

[illegible]

湯金の類を入る。暗黒も
 元々棒鐵、舊い字係と
 暗之鉄、一と退之鉄、を
 此の懷巾も、入用の
 変は、そのなり

誰長思
 中乃名
 用心
 萬家

○火の迫れ煙の立ち絶えたる如く大抵の條の計と
 尋ねて取らるる是の條とて、火の迫るる如く
 と云ふは、排れ水の出るのと出づるを、喉のいきなり
 襷のあつた退く火災の事、命の危ういといふ
 知るは、火の金の貨とて、人々今も換ふし
 他の幾ひとあつて、金貨も用ひまじきと云ふ

予防時報 41

まず、江戸から明治にかけての防火まちづくりの流れについて簡単に触れておきたい。江戸時代は、徳川家康が征夷大將軍となった1603年から徳川慶喜が大政を奉還した1867年までを指す場合が多い。各種資料によれば、江戸ではこの間に約200件の大火が記録されている。大火の定義はまちまちであるが、1、2年に1度は江戸のどこかで大規模な火災が起こっていたといってもよいだろう。江戸の発展にもかかわらず大火の源になる建物を石やレンガで造り不燃都市を構築するといった動きはなかった。

明暦の大火(1657年)の時に火除け地・防火堤・広小路などを設け、御城を守る手立てとしたことが本格的防火街づくりの最初と言ってもよいが、多くの建物が燃え易いままでは強風下に延焼拡大を抑えることは無理であった。耐火造で街づくりをしなかった理由は、日本の大部分は温帯モンスーン気候帯に属し森林が豊富であり、木で夏向きの家をつくり暮らすことがごく当たり前であったこと、大火は経済の活性化に有効であり結果的に庶民が蓄財できないことは幕藩体制維持のための必要悪であったと考えられること、黒船が来るまでの国策は国際貿易なしでも済んだこと、地震国であり石やレンガで造家することは危険であったことなどが挙げられよう。

明治以降は列強に伍する国家とするために殖産興業・富国強兵が重要課題となり、火災で国力を消耗することは避けなければならない時代となり、都市の不燃化へ向けた施策が近代都市の建設に呼応して推進されるようになった。その嚆矢は明治14年(1882)に施行された東京防火令であり、市街地の幹線道路に面した部分を3構造(土蔵・石・煉瓦造)として路線防火帯を形成し、その背後の領域(飴子部分)にある建物の屋根は瓦葺きとする法的規制である。これによって大方の大火は撲滅されたが、地価の高騰もあり木造密集地域が少なからず存在し各木造の難燃化対策も十分ではないため、震災や戦災で市街地が一面の焼け野原となった。密集木造に起因する大火は昭和30年代まで発

生し、今日でさえも大地震が発生すると市街地大火の危険性が指摘されている。

そこで、建物の防火に係わる材料工法と消防防災の面から、火防の策を再考して大火の芽を摘むことは重要な視点である。昔から左官による土蔵造りは大名・商家・豪農などの間では盛んであったが、夏の湿気を嫌い浮き屋根とした蔵は火事に弱かった。この瓦版は、江戸末期に活躍した浮世絵師溪斎英泉(寛政2年(1790)～嘉永元年(1848))によるもので、壁と窓の隙間や各所の孔を塞ぐ目塗りとして用心土を準備しておく、不用意で間に合わない時は味噌でもよい、用心土は15～16日かけて下から上へと鋺で重ね塗りして火災に備えておくその後悔しないで済む、屋根から火が入ったら直ぐに水を注ぎ二階の扉を開けて荷物を取り出せるように鍬・釣瓶・曳き紐を備えておく、所有者不明の蔵の周囲は消火しておくなど、蔵持ちのための類焼防止の心得が記されている。現在は、シーリング・ガasketなどの化学製品で目地等を塞ぐことが普通になっているが、火に炙られた時に炭化・収縮・脱落などを起こさず、火事後は容易に除去できる材料では左官材に勝るものはないだろう。また、最近では雨戸が付いていない家も多く、例えあっても災害に弱いものが大部分で、土蔵扉のような遮煙・遮熱・遮炎性のあるものは少ない。木造に住み維持するためには、大火防止・人命安全が第一で、火の用心・初期消火の重要性を再認識する必要がある、江戸の知恵に学ぶところが多い。

ある商家には、より高い所まで水が届くように、取手を逆さに付けた柄杓を備えていた。なお、現在は初期消火用の消火具・簡易消火パッケージ・クイックレスポンススプリンクラーなどが出回り、初期消火の確度が向上している。また、取っ手を付けた箱を横にして棚に入れ、その中に大福帳などを納めて商売し火事のときは直ぐに運び出せるようにする、床下や庭には穴蔵を造っておく、さらに窓には昆布簾を下げ、水をかけて火の粉を防ぐ、この簾は大火後の食料難に資するなど興味深い知恵があった。

菅原 進一(東京理科大学 教授)